



PALIS'S TEXT WORKS

# Teacups

～第一話～

© *Palismiki*

# 『Teacups』

## 第一話

### 「恋の予感」

#### [登場人物]

- 1 : 琴乃(18)…主人公 『teacups』 店員
- 2 : 真鈴(18)… 『teacups』 店員・マスターの姪
- 3 : マスター(41)… 『teacups』 店長
- 4 : ほのか(13)…エピソードヒロイン中学生
- 5 : 海[カイ](13)…エピソード主人公中学生
- 6 : 凜(13)…ほのかの幼馴染
- 7 : 吉川(13)…凜の彼氏                      …他

作： 茂呂 勝政

1	海岸線・情景
	<p>○タイトル『Teacups』OP曲in&amp;テロップ</p> <p>○海岸沿い・波打ち際・カモメ・少し曇り気味の空。 風が強い。</p>
2	Teacups店舗前
	<p>○Teacupsのドアが開くとマスターが立看板を持ち出てくる。 伸びをしながら嬉しそうに空を仰ぐ。</p> <p>マスター 「ん～～っ！」</p>
3	琴乃の出勤風景：海岸線～Teacups
	<p>○OP曲テロップに合わせ琴乃が自転車で走るカット。</p> <p>○OP曲F.0. 琴乃がTeacupsに到着する。 マスターは開店準備を進めている。</p> <p>琴 乃 「マスター、おはようございます！」</p> <p>マスター 「おはよう琴乃ちゃん、今日もいい天気だね～」</p> <p>○琴乃、空を仰ぐ。空は曇り空。</p> <p>琴 乃 「は、はあ・・・」</p> <p>○マスター、満面の笑みで海を見入る。</p> <p>マスター 「うんっ!いい波来てるよ～♪」</p> <p>○波カット挿入。</p>
4	中学校の通学路
	<p>○真鈴が家からあわてて出てくる。</p> <p>真 鈴 「ヤバイ、遅くなっちゃった」</p> <p>○ちょっと駆け足の真鈴。 その横を走り抜ける男子中学生カイ。</p> <p>カ イ 「真鈴ちゃん、おはよ～っ！」</p> <p>真 鈴 「お～!カイ、おは～っ♪」</p> <p>カ イ 「うはあっ、今時いわねえ……真鈴ちゃんヤバイよ」</p>

真 鈴 「えっ!? 今、言わないの?(ちょっとあせる)」

カ イ 「俺、今急いでっからまたねーっ♪」

真 鈴 「おうっ♪(ニッコリ)」

○走り去ろうとしたカイは、思い出したように振り返り真鈴に向き直す。

カ イ 「あっ、……真鈴ちゃん、あ、あのさ……」

真 鈴 「ん?? どしたの?」

○切り出しづらそうなカイ。

カ イ 「……やっぱいいや、なんでもない!」

○走り去るカイ。

真 鈴 「なんなのよ?」

5

Teacups店内

○Teacupsに到着する真鈴。

真 鈴 「おっはよ〜♪」

琴 乃 「あ、真鈴ちゃん!おはよ〜う」

マスター 「おっ!遅かったな、給料から引いとくぞ」

真 鈴 「ホンのちょっとでしょっ!?コレ以上けずられたら無くなっちゃうよ」

マスター 「また減らず口を…姪じゃなかったらとっくにクビにしてるぞっ」

真 鈴 「あらっ、あたしクビにしたら仕事する人、琴乃ちゃんしかいなくなっちゃうね」

マスター 「なにおっ!」

琴 乃 「まあまあ…」

6

中学校前

○登校時間。ほのかと凛が仲良く登校している。  
○それを物陰から見つめる視線(カイ)

カ イ 「よ、よしっ…チャンスは一瞬だぞ……」

○ほのかと凜が校門の前まで差し掛かる。  
○校門の前では吉川が手を振っている。

凜 「あっ!吉川く～ん♪」

○ほのかを置き去りにして吉川へ駆け寄る凜。  
ほのかは苦笑しながらゆっくりと二人に近づく。

○ほのかの背後に近づく影。  
○ほのかの背中を急に叩かれる。(バシッ)

ほのか 「きゃあっ!?(ビックリ)」

カ イ 「おはよっ!(無駄に爽やか)」

○そのまま走り去りながら振り返りニッコリと笑うカイ。

カ イ 「今日も一日がんばろうなっ!!」

○そのまま元気に走り去るカイ。  
○背中をさすりながら、ぽかんとしているほのか。

ほのか 「な……なに??」

7

教室内

○教室に入ってくるほのか、駆け寄る凜。

凜 「ごめえ～ん、ほのかちゃん!置いてけぼりにして  
てっきりついて来てるかと思ってたのお～!」

ほのか 「ううん大丈夫。だって凜ちゃんてば今、吉川君とラブラブ  
だもんね♪」

凜 「吉川君も大事だけどお…それ以上にほのかちゃんの方が大  
事～っ!」

○ほのかに抱きつく凜

凜 「ねえっ!ほのかちゃん、凜の愛人になって♪ねっ♪ねっ♪」

ほのか 「はははっ、愛人って……(苦笑)」

吉 川 「凜ちゃん!僕はどうなるんだよ～っ!」

凜 「吉川君は本妻だからっ♪」

○苦笑しつつ、ちょっと呆れるほのか。

8	Teacups外観
---	-----------

○Teacups外観カット

9	Teacups店内
---	-----------

○マスターがテーブルに隠れながら外に出ようと出口に向かっている。

真 鈴 「……おじさん?(怒りに震える声)」

○煽り構図でマスターを見下ろす真鈴。  
○マスターの首根っこを掴んで引き上げる真鈴。

真 鈴 「また仕事サボって海行こうとしてたでしょうっ!？」

マスター 「いいじゃあんっ!?!お客誰もいないんだからっ!!」

真 鈴 「店主がそんなだから地元に信用がないんじゃないのよっ!？」

マスター 「うるさい!うるさいっ!俺は海の男なんだよっ!  
(ちょっとかっこつけて)海が……波が俺を呼んでいるんだよ……」

○勢いをつけて走り出そうとするマスターのTシャツを掴み引きずり戻す真鈴。

真 鈴 「海の前に店があんたを呼んでるっつーの!  
ほらっ!琴乃ちゃんからもなんか言ってやってよ」

○琴乃、漫画を読みながらスンスンと泣いている。

琴 乃 「良かった……幸せになれてほんと良かった……」

真 鈴 「こ、琴乃ちゃん?……その本読むの何回目だっけ?」

琴 乃 「8回目……良い話は何回読んでも良い話よねえ～うんうん」

真 鈴 「7回泣いてまだ泣ける神経が凄いわ……(少し呆れて)」

○ふと気付くとマスターがいない。

真 鈴 「あっ!？」

○深い溜息を吐く真鈴。

10	Teacups外観
----	-----------

○Teacups外観に響く真鈴の嘆き。

真 鈴 「やっぱり今日も暇なの～っ!？」

11	中学校の廊下
----	--------

○ほのかが理科の実験道具をいっぱい抱えて廊下を歩いている。

○横の教室の扉が急に開いて男子生徒が飛び出してくる。

○ほのかと衝突する。

ほのか 「きゃっ!？」

○二人とも倒れこむ。

相手の声 「いってえなあ……どこに目え付けて歩いてんだよっ!？」

ほのか 「えっ!？ぶつかってきたのそっちだしっ!!」

相手の声 「なにいっ!？」

○お互いに相手を確認する。ほのかにぶつかった相手はカイ。  
ほのかと判り動揺するカイ。

カ イ 「うわっ!？うそっ!？」

ほのか 「(きょとんとしつつ)……(朝の男と判り)!？あああっ!？  
あんたは朝のっ!？」

カ イ 「あ、あのっ……だ、大丈夫か？(ほのかを起こしながら)」

ほのか 「大丈夫じゃない～っ!痛い～っ!!」

○二人で実験道具を拾う。

○それを差し出すカイ、ぶっきらぼうにぶん取るほのか。

ほのか 「もうっ!あたしに何の恨みがあるのよっ!？」

カ イ 「べ…別に恨みなんかねえよ(目を逸らしつつ赤くなり)」

ほのか 「今日の朝も叩いたし……」

カ イ 「あ、あれは…ただの挨拶じゃねえかよ」

ほのか 「挨拶っ!？めちゃめちゃ痛かったんだからあっ!  
だいたいなんであたしが見ず知らずのあんたなんか叩  
かれなくちゃいけないのよっ!？」

カ イ 「見ず知らずって……だ、だから……(もじもじして)」  
 ○カイが一拍おいて、真面目にほのかの目を見て…。

カ イ 「こ、これから知り合えばいいじゃないかよっ！」  
 ○ほのか、ちょっとドキッとするが、すぐに我に返る。

ほのか 「キモイ～っ！！なに～っ！もう～～っ！！」

カ イ 「き、キモいって……」

ほのか 「とにかくっ！もう二度とあたしに近寄らないでっ！！」  
 ○ぶんぶんと怒って歩いていくほのか。  
 それを見つめるカイ。

カ イ 「……これは、イタイなあ…」

12

夕方の海岸

○買い物袋を下げてメモを見ながら海岸沿い道路を歩く真鈴。

真 鈴 「えっと……買い忘れは、無いな……」

○真鈴、ふと海に目をやると、何かに気付きハツとする。

真 鈴 「あっ！？」

○海では、マスターが軽快にサーフィンをしている。  
 ○そして、マスターと並んでサーフィンに励むカイ。  
 (しばしサーフィンシーン)

○サーフィンが終わり陸に上がってくる二人。

カ イ 「すげえやっ！やっぱ師匠にはかなわねえなあ」

マスター 「はっはっはっ♪お前とはキャリアが違うからな～♪(笑)」

○そこに誰かの拍手が聞こえる。(パチパチパチ…)

マスター 「いやいやいやいやどうもどうも、ありがとう～♪」

○マスターが拍手の方向に向き直ると、そこには真鈴が怒りの笑みを浮かべて皮肉の拍手を送っている。

マスター 「あ……(凍る)」

真 鈴 「……満足？(皮肉たっぷり)」



○マスターがボードを小脇に抱え逃げる。

真 鈴 「コラっ！！ちゃんとお店に戻りなさいよっ！！」

○真鈴腕を組んで呆れている。

真 鈴 「まったく、ちょっと目を離すとすぐこれなんだから……」

カ イ 「ははっ、師匠にも怖いモンがあるんだなあ」

真 鈴 「なによっ！？」

カ イ 「お～コワっ」

13

夕暮れの海岸沿いの道

○一緒に歩く真鈴とカイ。

カ イ 「真鈴ちゃんさ……中学ん時、どんな奴が嫌いだった??」

真 鈴 「なによ急に？」

カ イ 「ち、ちょっとね……へへっ(照れている)」

真 鈴 「そうねえ……ガキが一番ダメね。小学生じみたくっだらないいたずらとかするバカ」

カ イ 「(思い当たるフシが有り焦る)ふ、ふ～ん……じ、じゃあさ、じゃあ……どんなヤツが…好きだった？」

○真鈴が何かを察してニヤつく。

真 鈴 「おやあ～？カイってば……もしかしてえ～♪」

カ イ 「な、なんだよっ気持ちワリィな(照れて)」

真 鈴 「そういう話なら、ちょっと付き合いなさいよ」

カ イ 「……いや、いくらなんでも歳の差が……(変に照れて)」

○真鈴に耳をつままれ引っ張られるカイ。

真 鈴 「ちょっと顔貸せって言ってんのよ」

カ イ 「いてててっ」

○琴乃と真鈴がニヤついて並んでいるツーショット。

琴乃&真鈴 「へえええ〜♪」

○Teacups店内カイの座っているテーブルに琴乃と真鈴も対面で座っている。マスターはカウンターで作業。

真 鈴 「カイにも好きな子がねえ〜♪へえええ〜♪」

琴 乃 「カイ君も大人になったんだねえ……(しみじみ)」

マスター 「ガキが…色気づきやがって(笑)」

カ イ 「(カイが真っ赤になって)いけないのかっ!?  
俺が好きな子できちゃいけないのかっ!？」

○カイが座りなおして。

カ イ 「でもなあ……なんかツイてないんだよなあ……相性が悪い  
っていうか……」

真 鈴 「あんた、また一人で突っ走ってるんじゃないの??」

琴 乃 「ちゃんと優しくしてあげてるの??」

カ イ 「そういうのよくわかんねえから……どうすりゃいいんだ??」

○真鈴と琴乃、とりあえず考える。

真鈴&琴乃 「う〜ん??？」

琴 乃 「女の子にはまずアピールが大事ね♪」

真 鈴 「そう!それだっ!!」

カ イ 「あんたサーフィン上手いんだから!彼女を海に誘って腕前  
披露してやるのよ〜♪」

○真鈴と琴乃が立ち上がってエキサイト。  
芝居がかって立ち振る舞う。

琴 乃 「そしてカイ君にウツトリとした彼女と浜辺に並んで夕日  
を見るの〜♪」

真 鈴 「どうだい?この夕陽……綺麗だろう?(男役風に)」

琴 乃 「素敵……(女役風に)」

真 鈴 「君の方がずっと綺麗さあつ」

琴 乃 「嬉しいっ……カイ君」

○ギュッと抱き合う真鈴と琴乃。  
○肩を組んでカイに向きなおす二人、顔は満面の笑み。

琴乃&真鈴 「う～んっ♪これで完璧っ！！」

カ イ 「おお～っ！！(拍手)」

○マスターも呆れながら皮肉っぽくダラダラと拍手。

15

校舎内(日中)

○ほのかが一人女子トイレから出てくる所を見かける凜。

凜 「あっ、ほのかちゃ……(声を掛けようとして止める)」

○ほのかにカイが近寄る。それを遠巻きで見詰める凜。  
○ほのかの肩をポンと叩くカイ。

カ イ 「よっ♪」

ほのか 「……………(カイをちら見しつつ無視)」

○カイを無視して一人歩くほのか。

カ イ 「お、おいっ！ちょっと待ってば～っ！」

ほのか 「あたしは用なんてないもん」

カ イ 「永澤に無くて俺にはあるのっ！」

○カイの方をクルッと向き直るほのか

ほのか 「ちょっと！呼び捨てにするのやめてくれるっ!？」

カ イ 「いいじゃんそんなの別に……」

ほのか 「イヤなものはイヤなのっ！」

○また前を向き歩き始める。

カ イ 「じ、じゃあ……」

○カイ、ほのかの前に回ってニッコリと笑う。

カ イ 「ほのかって呼んでいいか??」

○ドキッとさせるほのか。

ほのか 「べ、別に……なんとも呼ばなくていいし……」

○ほのか、ちょっと照れるが悟られないように目を伏せる。

カ イ 「それじゃあ話もできないじゃんかあ～」

ほのか 「だからっ！！あたしは話すことなんて無い！！」

○ほのかがカイを振り切って走り出そうとする。  
○カイがその前に出て、ほのかの両肩を掴む。

カ イ 「ちょっと！」

ほのか 「！！」

○ほのか、ちょっとびっくりして静かになる。  
俯いて目は伏せている。

カ イ 「永澤にいいモン見せてやるよ」

ほのか 「……いいもの？」

カ イ 「ああ、今日の午後5時に海岸に來い、絶対だぞ」

ほのか 「……………」

○ほのか、戸惑っている。カイは走り去っていく。

カ イ 「じゃなっ！絶対來いよ！」

ほのか 「ち、ちよっ……あ、あたし行かないよ」

カ イ 「絶対だぞ～！待ってるからな～！」

○カイが見えなくなる。

ほのか 「……行かないって……」

○ほのかの肩を叩く人影。後ろを振り返るほのか。

ほのか 「あ、あたし、行かないからっ！」

○そこにいたのは凜。

凜 「へ？どこへ??」

ほのか 「り、凜ちゃんっ!？」

凜 「ね？今の3組の佐々木カイでしょ？」

ほのか 「佐々木……カイ？」

	<p>凧 「ほのかちゃんと佐々木君、なあんか仲良さそうだったけど……付き合ってるの？」</p> <p>ほのか 「じょっ！冗談っ！！なんでそうなるのよっ!？」</p> <p>凧 「違うの？」</p> <p>ほのか 「違う！違うっ！絶対違うよっ!!」</p> <p>凧 「なあんた、つまんなあ～い……せっかくダブルデートできるかと思ったのになあ」</p> <p>ほのか 「……………」</p> <p>○ほのか、目を逸らす。</p> <p>凧 「お似合いだと思うよ。ほのかちゃんと佐々木君」</p> <p>ほのか 「もうっ！凧ちゃんっ！」</p> <p>凧 「怒らない、怒らない(笑) 彼氏は良いよ～♪ほのかちゃんも作れば良いのに～♪」</p> <p>○ほのか、複雑な表情。</p>
16	<p>海岸(日中)</p> <p>○ボードを持ったカイが海岸に立ち、海を見ている。 ○カイ、防水腕時計を見る。時刻は午後3時50分。 ○カ海に向き直すカイ。</p> <p>カ イ 「……よしっ！」</p> <p>○カイのサーフィンシーン。歳の割には上手い。</p>
17	<p>下校シーン</p> <p>○ほのかと凧と一緒に下校している。 ○凧が喋っているがほのかは心ここに在らず、という感じ。</p> <p>カイ回想M『今日の午後5時……』</p> <p>ほのか 「……………」</p> <p>カイ回想M『絶対だぞ～!』</p> <p>凧 「……って感じでえ～そんなことばっか言うのよもう。どう思う??」</p> <p>ほのか 「……………」</p>

	<p>凧 「ん？ほのかちゃん？」</p> <p>ほのか 「……ん？えっ？ううん、どうなんだろうねえ～？そういうのって……」</p>
18	<p>海岸(夕方)</p> <p>○サーフィンをしているカイ、数カット。 だんだん暗くなっていく。 ○調子の良かったカイが失敗して海に投げ出される。 ○ボードを脇に抱えて陸に上がってくるカイ。 ○砂浜に大の字になって寝転ぶカイ。</p> <p>カ イ 「はあっ、はあっ……はあっ、はあっはあっ……」</p> <p>○腕時計は午後6時35分を表示している。</p>
19	<p>Teacups店先(夕方)</p> <p>○琴乃が店ドアから外に出る。</p> <p>琴 乃 「看板の電気点けるね～」</p> <p>真 鈴 「お願い～」</p> <p>○店先にサーフボードを持って立ち尽くしているカイ。</p> <p>琴 乃 「(カイを確認して)あらっ？」</p> <p>カ イ 「……………」</p>
20	<p>Teacups店内(晩)</p> <p>○店内、カイがテーブル席に座っている。 琴乃と真鈴は同席、マスターはカウンター。</p> <p>琴 乃 「……そう、彼女来てくれなかったんだ」</p> <p>真 鈴 「うーん……」</p> <p>カ イ 「なんか……もうどうでもイいかなあ～って思ってきた。 親しくなるも何も、まともに話もできないんじゃないかな ようもねえじゃん……」</p> <p>真鈴&amp;琴乃 「……………」</p> <p>カ イ 「俺……多分向いてねえんだと思うわ、こういうの。 もう女はいいや、これからはサーフィン一筋でいくわ ……なあんて(笑)」</p>

マスター 「エライ！よく言ったぞ少年！」

○ほんの少しの間。その間を破るように真鈴がつぶやく。

真 鈴 「確かに向いてないのかもねえ…あんた(言い捨てる感じで)」

琴 乃 「ちょっ……真鈴ちゃん(カイの気持ちも考えろ…的に)」

真 鈴 「恋愛ゲームにはね…、でも人を想うって事に関しちゃ割と  
イイ線いってると思うよ」

カ イ 「え？」

真 鈴 「あんたがただ誰かと付き合いたいってんなら別にその娘でな  
くても他の娘でもイイわけじゃない？」

カ イ 「う～ん……」

真 鈴 「その娘がダメなら誰とも付き合わないのは、結局その娘  
じゃないとダメってことでしょ？」

琴 乃 「確かに」

真 鈴 「あんた、今のまんまじゃサーフィン戻ったって、まともに  
できるわけないと思うよ……その娘の事完全にケリつける  
まではね」

カ イ 「完全に……(考え込む)」

○マスターがカイに紅茶を差し出す。

マスター 「よし、じゃあこれは俺からのおごりだ」

琴 乃 「"kahuna tea"……幸せになれる紅茶なんだよ」

真 鈴 「ウチの店主直々のだからね、超レアだよ(笑)」

マスター 「うるせー」

○何かを理解したカイ。  
紅茶を手にとると、熱いながらも一気に飲み干す。

マスター 「おいおい、もっと味わって飲めよ」

カ イ 「ぷはあーっ！(カップをテーブルに置く)じゃあ俺帰るわ！  
ありがとなっ！」

○走って店から出て行くカイ。カイの後姿に  
優しく微笑む琴乃と、小さく手を振る真鈴。

マスター 「なんだか、若い内から大変だなあ最近のガキは」

琴乃 「若いうちじゃなきゃあんな恋なんてできないのかも知れないなあ……あたしもがんばろうっと」

真鈴 「あたしもがんばろうっと♪(マネをして)」

マスター 「あたしもがんばろうっと♪(流れで可愛い子ぶってマネする)」

真鈴&琴乃 「……(怪訝な顔をして見る)」

21 ほのかの家(朝)

○電話をしているほのか。相手は凧。

ほのか 「え？吉川君、今日日直なんだ？」

凧(電話) 『うん、で、あたしもお手伝いしに早く行こうかなあ～って思って……』

ほのか 「そうなんだ？解った、じゃあ今日は一人で登校するから…うん、うん……うん、じゃあ後で学校でね」

○電話を切るほのか。微妙な表情。

22 ほのかの登校(朝)

○通学路を歩きながら、考え事をしているほのか。  
カイの言葉が頭をよぎる。

X            X            X

○カイとの回想シーン。

カイ回想 『今日の午後五時に海岸で……』

カイ回想 『絶対来いよ～！』

X            X            X

ほのかM 『……ずっと待ってたのかな？』

ほのかM 『……怒ってるかな？』

ほのかM 『……今日怒られたりするのかな？』

ほのかM 『……っていうかもう嫌われたかな？』

ほのかM 『……もう、話しかけても来ないんだろうな……』

○俯いて歩くほのかの背中を背後から叩く影。



カ イ 「オスッ！」

ほのか 「えっ!？」

○振り返るとカイがニッコリ笑っている。

カ イ 「なあって昨日来てくんなかったんだよ〜」

ほのか 「あ……だ、だって、あたしにだって……都合ってものがあるし……」

カ イ 「用事あったのか？」

ほのか 「べ、別に……(もう目が見れない)」

カ イ 「うん、じゃあ今日だっ!今日の夕方…」

ほのか 「だから…行かないってば……(断り方が弱い)」

カ イ 「じゃあ、明日。明日は？」

ほのか 「……わかんないよお」

カ イ 「じゃ、いつでもいいよ。ずっと待ってるから」

○少し顔を上げてカイの顔を見る。  
カイはニッコリ笑っている。

ほのか 「……………」

カ イ 「あの海岸でずっと待ってるからな」

○ほのか俯く。

ほのか 「……うるさいなあ(ボソッと呟くように)」

カ イ 「……え？」

○ほのか、カイを突き飛ばす。

ほのか 「なんでそうやっていつもあたしの中に入ってくるの!？」

カ イ 「……………あ」

ほのか 「行かないってば行かないっ……あたし絶対に行かないからっ!!」

○その場から駆け出すほのか。  
○その後姿をずっと見詰めるカイ。表情は酸っぱい。

23	ほのかの家外観(夜)～ほのかと凜の電話～
	凜(電話)『今朝はごめんね……一緒に学校行けなくて』
24	ほのかの部屋(夜)～ほのかと凜の電話～
	<p>○風呂上りのほのかがパジャマでベッドに寝転んで、コードレス電話の子機を使い電話をしている。相手は凜。</p> <p>ほのか 「うん……いいよ。気にしないで」</p> <p>凜(電話)『でも……ほのかちゃん今日元気無いみたいだったから…』</p> <p>ほのか 「そんなコトないよ……もしそうだったとしても凜ちゃんのせいじゃないから」</p> <p>凜(電話)『そうなの？良かったあ』</p> <p>○元気は無いが少し微笑むほのか。</p>
25	凜の部屋(夜)～ほのかと凜の電話～
	<p>○凜の部屋</p> <p>凜 「あ、そうだ、それでさあ…明日の日曜日久しぶりに二人だけでどっか出掛けない??」</p>
26	ほのかの部屋(夜)～ほのかと凜の電話～
	<p>○寝転がっていたほのかが上半身を勢い良く起こす。</p> <p>ほのか 「それいい！OK！どこ行く??(急に元気になる)」</p> <p>凜(電話)『駅前のデパートに買い物に行こうよ!』</p> <p>ほのか 「うんっ！イイっ！！それで1階のフードコートで『prime』のチーズケーキ食べようっ♪」</p> <p>凜(電話)『えっ？甘い物食べるの??また太っちゃうよお!』</p> <p>ほのか 「はははっ♪最近凜ちゃんキテるもんねえ～特にほっぺたの辺りとか(笑)」</p> <p>凜(電話)『いいもん、それでも可愛いって言ってくれるんだも～ん♪』</p> <p>○少し嫉妬するが悟られないように平静を保つほのか。</p> <p>ほのか 「ふふっ……いいね。ラブラブだあ」</p>

凜(電話)『えへ♪じゃあそういうことで、明日10時ごろどう?』

ほのか 「OK♪た~のしみ~♪」

凜(電話)『じゃあ明日10時にね』

ほのか 「うん、じゃあね~♪」

- 電話を切るほのか。
- 子機を枕元にポイッと投げて一息。
- またベッドの上に寝っ転がるほのか。

ほのか 「ふうっ……」

- ほのかの頭の中で凜とのやり取りが渦巻く。

凜(回想)『それでも可愛いって言ってくれるんだも~ん』

ほのか(回想)『ラブラブだぁ……』

凜(回想)『えへっ♪』

ほのか 「……ああ~っ!寝よ寝よ」

- 電気が消えるほのかの部屋。
- 布団に入って寝るほのか。

X X X

- ニッコリ笑うカイ(回想)

X X X

- 布団の中で目をつぶるほのか。

X X X

- 照れているカイ(回想)

カイ(回想)『これから……知り合えばいいじゃんか……』

X X X

- ほのかの寝返り。

ほのか 「……う~んっ」

X X X

- カイのニッコリ表情(回想)

カイ(回想)『ほのかって呼んでいいか?』

	<p>○カイの微笑む表情(回想)</p> <p>カイ(回想)『いつでもいいよ……ずっと待ってるから』</p> <p>カイ(回想)『あの海岸で……ずっと待ってるからな』</p> <p style="text-align: center;">X            X            X</p> <p>○ほのかが枕を顔に押し付ける。 ○枕から顔半分を覗かせる。顔は高潮し困っている表情。</p> <p>ほのか 「……………」</p> <p>○夜は更ける。</p>
27	<p>ほのかの部屋～永澤家屋内(朝)</p> <p>○朝の風景。 ○布団の上の電話の子機が鳴っている。(プルルルルッ) ○ほのかの部屋の中全景。気持ち良さそうに眠るほのか。 BGで電話の呼び出し音が切れる。薄く母親の会話の声。</p> <p>母親off 『もしもし…あら～凜ちゃん久しぶりねえ元気だった？ ……うん、うんうん…まあ～』</p> <p>○ほのかグーグー寝ている。</p> <p>母親off 『あ、ちょっと待ってて、ほのかったらまだ寝てるのよ… ちょっと待っててね……ほのかーほのかー』</p> <p>○はっ!?として飛び起きるほのか。まだ寝ぼけている。 ○ベッドの上に座り込みながらだんだんハッキリしてくる。 ○テーブルの上の時計を見ると9時30分</p> <p>ほのか 「んがっ!？」</p> <p>○ほのかの部屋の戸が開く。</p> <p>母 親 「ほのか、さっきから呼んでるのに……凜ちゃんから電話よ」</p> <p>○母親の言葉を聞き終わるかどうかのタイミングで母親の脇をすり抜けて、扉の外に飛び出すほのか。 ○母親、ベッドの上の子機を取り上げてため息一つ微笑。 ○階段を降りて親機の手話器を取り電話に出るほのか。</p> <p>ほのか 「あっ!…凜ちゃん?ゴメンッあたし今起きちゃったみたいで……ゴメンね、すぐ支度するから、まだ間に合う……」</p> <p>○ほのかのアップ。固まる。(一瞬) ○屋内カット。</p> <p>ほのか 「……………あ、うん…なんだ、今日ダメになっちゃったんだ?」</p>

	<p>ほのか 「うん…別にイイよ……やだあ、そんなに謝らないでよ～ うん……うん、うん…うん、じゃあまた、学校でね…… うん、じゃあね～」</p> <p>○静かに置かれる親機の手話器。 ○ほのかの俯いた姿遠景。ポーっとしている感じ。 ○家の中の数カット描写。それに合わせて下台詞。</p> <p>ほのか 「……おかあさん、おなか減った」</p> <p style="text-align: center;">X            X            X</p> <p>○日曜日の風景。食べ終わった食器が流しに置いてある。 居間。つけっぱなしのテレビ。 テレビの前で大の字に寝転がっているほのか。 天井を見詰めポーっとしている。</p> <p>ほのか 「……………」</p>
28	日曜日の海岸線の散歩(昼間)
	<p>○車通りの多い海岸線の歩道を歩くほのか。 普通に辺りを見回しながら散歩をしている。 特に笑顔とかは無い。</p> <p>○ほのかの視線が止まる。</p> <p>ほのか 「……！」</p> <p>○行き交う車の間に見える反対車線のバス停に凜と吉川君の姿。二人はほのかに気付いていない。</p> <p>○仲良くしている二人の前を行き交う車。その車越しに呆然と立ち尽くすほのか。二人はまったく気付いていない。</p> <p>○ほのかは二人に見つからないように、道路側からは腰くらいの高さの堤防を乗り越え、砂浜に降りて隠れる。</p> <p>○バスが来て二人が乗り込む。</p>
29	浜辺(昼間)
	<p>○バスの走り去る音が響く中、ほのかは防波堤のコンクリートにもたれて体育座りの状態で肩を落とす。</p> <p>ほのか 「……ま、そういうことじゃあ……ねえ……」</p> <p>○うな垂れるほのか。脱力。 ○ほのかの肩が揺れている・鼻をすする音が潮騒に紛れる。 ○ほのかは涙を拭いて顔を上げると、目の前には一面の海。 ○砂浜で遊ぶ恋人達や親子連れや、仔犬を連れて散歩する老人の姿など、海岸に集う数組のカット。</p>

	<p style="text-align: center;">X            X            X</p> <p style="text-align: center;">○カイの回想</p> <p>カイ(回想)『ずっと待ってるから……』</p> <p style="text-align: center;">X            X            X</p> <p>○ハッとするほのか。沖を見回すとサーフィンをしている人がチラホラ。  ○頬に当たる潮風が気持ち良く、目を瞑るほのか。  ○ふと目を開けると、沖で高く飛び上がるサーフィンボード。陽光に照らされてキラキラと光る。  ○目を凝らすと、その板を必死で追い、抱き抱えて次の波に再トライしようとしているカイの姿。  ○カイの姿を見つけ、自然と表情が和らぐほのか。  ○サーフィンに乗るが調子が悪いのか？チョコチョコと失敗をするカイ。しかし、諦めずに何度も何度もトライしているカイの姿。  ○それを見詰めるほのかの中でいろいろな想いが花開いていく。  ○失敗続きのカイがやっとカッコ良く波を乗りこなす。それを見詰めながら微笑むほのか。</p>
30	浜辺(夕方)
	<p>○結局、日が傾き始めるまでサーフィンをするカイと、それを陰から見詰め続けていたほのか。  ○カイが岸に上がってきたが、ほのかは、見つからないように身を隠す。  ○カイが砂浜に大の字になって寝転がる。その姿を横目に、ほのかは防波堤を離れ歩道に上がり、そのまま歩いていく。</p> <p>○ふと、沿道におしゃれな喫茶店『Teacups』を見つけるほのか。そのまま『Teacups』に入店する。</p>
31	Teacups店内(夕方)
	<p>○扉に一番近い端の席に座るほのか。  ○琴乃がほのかにお冷を差し出し、これ以上無いほどの優しい笑顔で話しかける。</p> <p>琴 乃 「いらっしゃいませ…」</p> <p>ほのか 「あ……あのっ…あ……」</p> <p>○いろいろと胸にこみ上げてきて上手く喋れないほのかに優しい声で琴乃が話す。</p> <p>琴 乃 「大丈夫、焦らなくていいよ…ここはみんなが自分の時間を大切に場所だから……」</p>

○琴乃をじっと見詰めるほのか。

琴乃 「あなたの時間はあなたの物だもん…ゆっくりでいいんだよ」

○琴乃の言葉を聞いて涙がぼろぼろとこぼれてくるほのか。  
それを見て琴乃がオロオロとする。

琴乃 「えっ？あ、ごめんなさい……あたし何か悪い事言った？」

ほのか 「あたし……ちがうんです……あたし……」

ほのか 「あたし、あたし……好きなんです……」

○ぼろぼろと泣き出すほのか。

ほのか 「本当は好きなんですうう……(泣きながら言う)」

○琴乃が椅子に座るほのかを抱き寄せて背中を優しく撫でる。  
ほのかは琴乃の腰辺りにすがって泣き崩れる。

X X X

○紅茶を淹れている真鈴。

○対面に座る琴乃に今までの事を話すほのか。

ほのか 「ずっと一緒に遊んでた親友に彼氏ができたんです……  
その子は小学校からずっと一緒に遊んできて…姉妹みたいに  
仲が良かったんです」

ほのか 「…でも彼氏ができて、はじめはあたしと凜ちゃんの間に入  
ってきたオジャマ虫だったのに……なんだか…いつの間  
にか…あたしの方がオジャマ虫になって……」

ほのか 「…でも、祝福はしてたんです。凜ちゃんちょっと頼りない  
所あるし…吉川君、すごくイイ人だし…だから…ちゃんと  
応援してあげようって思ってたんです……」

ほのか 「でも……でも、なんか凜ちゃん…やっぱりあたしより吉川  
君の方が大事みたいで……あたしの方がずっと昔から凜  
ちゃんと一緒になのに……」

ほのか 「凜ちゃん…あたしにも彼氏作った方がイイとか……あたし  
は…あたしは、彼氏なんていないのに……」

ほのか 「そしたら……いきなりアイツが現れて……」

ほのか 「なんだか…急に馴れ馴れしくて…すごく強引で……ヤな  
ヤツなんです……ヤなヤツ…だったんです」

ほのか 「なんか……なんか…ワケわかんなくて……いっぱい嫌な事  
とか言っちゃって……意地悪な事も言っちゃって…あたし  
……なんかすごくヤな女の子で……」

ほのか 「でも……でも、いつも笑ってるんです…あたし、ひどい事ばっかしたのに……いつも笑ってるんです」

ほのか 「あたし……」

○ここまでのほのかの告白をしっかりと聴いている琴乃や一所懸命紅茶を淹れている真鈴の姿なども描写する。

○しばしの沈黙。

琴乃 「…気が付いたら好きになってたんだね」

ほのか 「……………でも」

○ほのか俯く。

ほのか 「嫌われてる……もう嫌いになっちゃってるに決まってるだ……あたし、ヤな子だもん……」

真鈴 「じゃあ、そんなあなたにいいものあげる」

○俯いたほのかの目の前に差し出される紅茶。

○顔を上げるほのか。

真鈴 「これは“KAHUNA TEA”って言って魔法の紅茶なの」

ほのか 「魔法の…？」

真鈴 「飲んでみて(優しく静かに)」

○ティーカップを両手で持ち、コクッと一口飲み、深く息を吐くほのか。

ほのか 「…おいしい……本当においしいです。こんなおいしい紅茶、今まで飲んだこと無いです」

マスター声 「それを美味しく感じるなら君はきっと幸せになれるよ」

○いつの間にかサーファールックのマスターが入り口の所に立っていた。

真鈴 「おじさん！」

マスター 「その紅茶の美味しさは、悲しい人を暖め、怒れる人を鎮め恋する人を勇気付ける…」

琴乃 「マスター……」

マスター 「現にこの俺もその味に勇気もらった一人だから…大丈夫。君はきっと幸せになれるよ」

ほのか 「……はい(涙目で笑顔)」



真 鈴 「仕事サボって遊んでた割にはイイ事言うじゃない」

マスター 「あ、すまんが、救急箱くれるか？」

琴 乃 「はい」

○救急箱を取りに行く琴乃。

琴 乃 「どこか怪我したんですか？」

マスター 「いや、俺じゃないんだ……少年が、ちょっとな」

真 鈴 「カイが!？」

○それを聞いてほのかがビクッとする。

○琴乃が救急箱を持ってくる。

琴 乃 「カイ君って…あの佐々木カイ君？」

○ハッとほのか、次の瞬間、琴乃の手から救急箱を奪い取って走り出す。

琴 乃 「ほのかちゃん!？」

真 鈴 「えっ?もしかして、あの娘が好きな男の子って……」

琴 乃 「カイ君っ!？」

32

夕暮れの浜辺(夕方)

○ほのかが走る。息を切らせて走る。

○砂浜に辿り着くと、浜辺で足を押さえているカイの姿。

カ イ 「あっ…痛つつっ……」

○足から血を流しているカイに影が被さる。

○顔を上げるカイ。そこには肩で息をしている汗だくのほのかが救急箱を手立てしている。

ほのか 「はあっ、はあっはあ…はあっ……」

カ イ 「あ……」

X X X

○海岸で包帯を巻かれたカイの足。ちょっとチグハグ。

ほのか 「はい、できた」

カ イ 「下手くそだなあ～」

ほのか 「(ムツとして)じゃ、ほどく~!？」

カ イ 「あ、ウソウソ(苦笑)」

○ほんのちょっとした間。

カ イ 「あ、あの…ありがとう…な」

ほのか 「べ、別に……(ちょっと照れて)」

○しばし沈黙。

カ イ 「……なんか喋れよ」

ほのか 「そっちこそ!…いつもはベラベラ喋ってるくせに」

カ イ 「バカ、俺は……そのお、お前を思って……(ゴニョゴニョ)」

ほのか 「あ~っ!今、バカって言った!!(怒)」

カ イ 「いやっ……あ、そ、それはっ……(海岸を見ると何かに気付くカイ)ああっ!ほらっ!あれ!あれ!(沖を指差す)」

○カイが指差す先には、海に沈む夕陽がめちゃくちゃ綺麗。

カ イ 「すごいっしょ!?夕陽」

ほのか 「……うん、ほんとだ…」

○二人が並んで砂浜に腰を下ろし、夕陽を眺めている図。

ほのか 「海ってさ……」

カ イ 「ん？」

○その光景を微笑んで見詰めている琴乃・真鈴・マスターの三人。

ほのか 「やっぱいいかも……」

カ イ 「でっしょおおっ♪」

33

登校(朝)

○ほのかが学校への通学路を歩いている。  
○ほのかに後から奔り寄り背中を叩くカイ。

カ イ 「オッス！」

ほのか 「もおっ!いちいち暴力振るわないでくれるっ!？」

カ イ 「そんなに強く叩いてないだろう……あれ？いつも一緒にいるあの子は？」

ほのか 「吉川君と登校…これでも気を使ってるんです〜っ」

カ イ 「とかいって〜俺と二人で登校したいってんでしょ？も〜♪はっきり言いな」

ほのか 「バツカじゃないの…ありえない」

○ほのか、呆れて一人ですかずかと歩いていく。

カ イ 「あっ！ちよっ、ちよっと待ってよっ！！ほのか〜！」

ほのか 「ほのかって呼ぶなっ！！」

カ イ 「いいじゃんか〜！ほ・の・か・ちゃ〜ん♪」

○走りながら振り返りあかんべーをするほのか。

第一話-終-

ドラマシナリオ『Teacups』

<http://p.booklog.jp/book/32807>

著者：ぱりみき

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/palismiki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32807>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32807>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.